毎週月曜日更新

カタカタ通信

第２２１号

「もしもの備え“孵卵器”」

２０２６年3月２３日

空と花が卵を抱きはじめて、もうすぐ１か月です。

コウノトリの抱卵期間（ヒナがふ化するまで親が卵を抱く期間）は約１カ月。ということは、そろそろ様子が気になる頃ですが、相手は生きもの。何事もこちらの思い通りになることばかりではありません。むしろ、そうでないときの方が多いかも。何が起こるかはわからないので、もしもの時のための準備もしています。

そんな準備のひとつが「孵卵器（ふらんき）」です。鳥の繁殖期には欠かせない存在です。

孵卵器は、温度や湿度を人が調節しながら卵を管理できる装置で、親鳥の代わりに卵をあたためます。ここでは、親鳥が卵をあたためられない状況になった時や、昨年のように卵を交換したり、卵の発育を観察したりするときに活躍してもらいます。

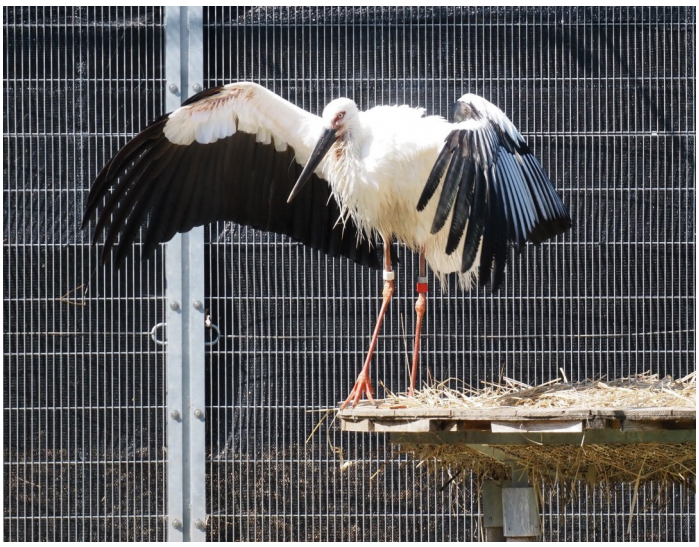
孵卵器 真ん中の台に卵を乗せます

今回は保育器もお借りしました

必要になったときにいつでも対応できるよう、毎年繁殖期に入る頃から電源を入れ、温度と湿度が常に安定するよう管理しています。今のところ、温度３７．３℃・湿度５０％前後を目安に設定しています。卵が入ったり、周りの温湿度が変わったりすると若干上下するので、日々チェックして調整しています。

今年は孵卵器のメンテナンスと修理も行い、先日受け取りに行ってきたところです。

本来は親鳥がしっかり抱卵し、何事もなくふ化して、巣立ちまで親鳥に育ててもらうのがもちろん一番です。とはいえ、親鳥だっていつも完ぺきとは限りません。いざという時によりよい対応ができるよう、こうした“もしもの備え”もしながら見守っています。



抱卵を交代後、水浴びをした花　ばたばたして乾かし中

天空の里　鴻巣市コウノトリ野生復帰センター

飼育担当：寺内